

我が家の奮闘記

愛知県名古屋市立神沢中学校

二年 木谷 千誉

弟が生まれたのは、私が十歳のときだった。それまで、父と母と私、そして祖母の四人で住んでいたが、弟という存在は私たちの暮らしを一変させた。

まず徹底したのは、弟が安全に過ごせる環境づくりだ。この本にもあるように、爪切りなどの刃物や小さなボタンは高いところに仕舞うようにした。また、私たち家族は二階に住んでいるため、家には階段がある。幼い弟は転げ落ちてしまうから、階段に近づかないように常備水の段ボールで壁をつくった。鉛筆やシャーペンなどはすぐに片付ける、アイロンなどは別の部屋で使うなどのルールができた。そして、弟が二歳になったあたりからおもちゃが増え始めた。今でも、リビングは弟のおもちゃで溢れかえっている。弟が機嫌を損ねるとミニカーをねだるため、かなりの数になった。最近では、かるたやパズルで遊ぶようになり、片付けるのがより大変になった。私はすっかり弟中心の生活になってしまったことが、少し悔しかった。私は十歳まで一人っ子だったため、おもちゃや部屋、両親までも独り占めすることに慣れていた。しかし、弟が生まれたら、そうはいかない。弟の世話もしなければならぬ。気をつけることも多いし、暮らしに制限がかかる。でも、振り返ってみれば、迷惑だと思っただけではなかった。弟がいることは嬉しいし、可愛くて大事な存在でもある。家族の変化に合わせて、暮らすことができるのだろうか。

脚が悪い祖母、仕事で夜遅くに帰る父、働き者の母、天真爛漫な弟、そして私。これからどんな変化が起ころうと、それに対応することはできる。家が家族にとって居心地のよい場所であるように、私は今日もリビングを片付ける。